



令和2年度

# 鹿児島県の教育

6月号

## 巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事  
県連合校長協会小学校長部会長

鹿児島市立山下小学校長  
六 笠 登 由

## GIGAスクール構想と アダプティブラーニング

鹿児島県の公立学校にパソコンが初めて導入されてから、早三十六年が過ぎた。当時、家庭にパソコンはほとんどなく、学校はあらゆる意味で文化の中心であった。教職員は、市販のソフトウェアがほとんど無い中、導入されたパソコンを子どもたちの理解や技能の定着に役立てようと、ベーシック等のプログラム言語を用いて教材を自作していた。私も、パソコンを利用して個別化教育や個性化教育の実践に夢中で取り組んできたものである。時は変わり、一般家庭にパソコンやタブレット、高速大容量のネットワーク回線が普及し、ICT環境は学校よりも家庭の方が格段に充実しているようになった。また、ソサエティ5.0時代に生きる子どもたちにとって、PC端末は鉛筆やノートと並ぶマストアイテムとなるとともに、AI（人工知能）の発達により、これからの社会において、プログラミング的思考を含んだ情報活用能力は必要不可欠な時代となってきた。

ことは、大きな意義があると考えられる。また、昨年末から政府はGIGAスクール構想を打ち出し、すべての小中学生に一人一台学習用PCを配備する計画を進めているところであるが、コロナウイルス感染症対策による学校の臨時休業を受け、五年間の計画をさらに前倒しするよう進めていると聞いている。

危機管理は、最悪のことを想定することから始まると言われている。児童生徒に一人一台のPCが配備された場合、次はその費用対効果が問われることになる。GIGAスクール構想では、「個別最適化された学び」の実現が求められている。「アダプティブラーニング」という言葉も聞かれるようになってきており、その実現に向け学校として何を行っているかが問われることになりそうである。また、新型コロナウイルスも今後第二波、第三波があることを想定すると、臨時休業となった際にはオンライン指導等ができる体制を整えておく必要がある。教職員のICTに関する技能の向上も含めて校長に与えられたハードルは高い。

県連合校長協会として、各学校における感染症予防対策とともに、配備されたPCの活用法等の情報共有に努めていきたい。

令和2(2020)年6月号

一般財団法人 鹿児島県校長会館  
〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13  
振替 02030-1-3192  
TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷  
鹿児島市東坂元二丁目29-1  
TEL 247-1605 FAX 247-2844

### \* おもな内容 \*

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	14
提言	3	趣味・文芸	17
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	18
子どもが輝く教育	7	専門部だより	19
心に残るひとこと	9	一般財)県校長会館だより	20
ある日の校長講話	11	編集後記	20



## 「南無阿弥陀仏」に

### たどり着くまで

文学博士（九州大学）  
鹿児島国際大学名誉教授

外 蘭 幸 一

略 歴  
昭和四六年三月 九州大学卒業  
平成三年四月 鹿児島経済大学教授  
平成三十年三月 鹿児島国際大学退職

御多分に漏れず、私も若い頃にはベシミズムやニヒリズムに落ち込み、情緒不安定な時間を過ごした。折しも学園紛争真っ盛りの大学では、街頭デモに参加しないノンポリ学生に居場所はないというような雰囲気の中で、福岡市の天神交差点の辺りでマイクを握り、意気盛んに「我々は命をかけて戦うぞ」などというシュプレヒコールを声高に叫んでいたものである。そんな気分の中には、「命を惜しむ」ということは恥ずべきことのように感じられ、早めに自死するのが自然であるかのような錯覚さえ覚えていた。

ところが、佐世保市での「原子力空母エンタープライズ号入港阻止」のデモに参加した時、最前列にいた私は機動隊の群の中に引き込まれ、警棒の嵐を受ける破目に陥った。ヘルメットの上からガンガンと凄い力で叩かれる。やがてヘルメットの割れる音がして、頭が痛いというよりも意識が遠のいていく。その瞬間、私は心底から「死にたくない」と思った。理由など何もなく、ただ「絶対に死にたくない」と思ったのである。遠のく意識を呼び戻し、私は「助けてくれ」と叫んだ。きつと大声で叫んだに違いない。

い。気がついたら、護送車の中に黙座していた。そのデモから大学に帰った私は、すでに思想的に転向していた。表向きは極左のように装いながら、内心では「如何にして穏やかに生きていこうか」と処世術に心を向けていたのである。六本松の教養部から箱崎の専門課程に進むに当たって、不勉強だった私が進学できる講座は「倫理学」か「印度哲学」の二つだけであり、それ以外には選択肢がなかった。私は社会の表舞台から隠居するような気持ちで印度哲学を選んだ。講座の学習内容には殆ど無関心で、何も知らずに進学したのである。迎え入れ指導する側では「三年ぶりに来た学生」ということで、驚くほど歓迎され、懇切に指導して下さった。その講座には寺院の子弟が多数在籍していたが、仏教が印度哲学の一種であることを知らなかった私には不思議に感じられたものである。元来鈍才の私にとって梵語の学習は困難な道程であったが、持久力だけはあったので、古代印度仏教を専門として遅々とした歩みを止めることなく、現在に至っている。その学修の成果の一つとして、「南無阿弥陀仏」の語義解釈がある。「南無」はナマス（心から信頼する）の

音訳であり、インドの挨拶「ナマステ」は「あなたを心から信頼する」という意味である。「阿弥陀」には無量寿（アミターユス）と無量光（アミターバ）という二つの意味が含まれている。阿弥陀仏は極楽浄土という天国の主であって、命終した衆生を往生させて救い摂るとされる。しかし、それはインド特有の文学的譬喩にすぎない。阿弥陀仏は衆生の内面深くに宿る永遠のいのち（無量寿）であり、常に衆生に希望を与え続ける永遠の光（無量光）である。「命」は無量なる「いのち」と有限なる「生命」との融合体であり、無限なる「いのち」は有限なる「生命」の中に宿り、「生」と「死」という命の活力源の相克を通じて、生命を躍動させる。生命とはいのちが躍動するために、永続する時間の中に出現した「一瞬の火花」である。故に「きちんと死ぬこと」は「きちんと生きること」であり、きちんと死ぬことによって生命はいのちに戻り、個体は全体に帰一する。死ぬことは躍動した個体が活動を一時休止して、命の全体に戻り「いのち」という極楽に往生することなのである。

機動隊に叩かれて死にそうな時に、「助けてくれ」と私に叫ばせたものこそ、阿弥陀仏であったに違いないと今は考えている。



## 子ども一人一人の個性「よさ」を 伸ばす教育の実現のために

田代小(隅) 田崎 武彦

「だれもが どこかで 何かが一番」  
本校、田代小学校に受け継がれている合言葉、キヤッチフレーズである。子ども一人一人の個性を見つめ、生かし、伸ばしていこうとする、これまで田代の教育に携わってこられた多くの教師の「願い」が込められている。この崇高な教育的価値が込められた願いを確かに受け継ぎ、実践していかなければならない重責を日々感じているところである。

子ども一人一人の個性を伸ばす教育の必要性は、県内全ての学校で謳われ、日々の教育活動で力を注がれている。ただ、現実の学校の現場では複雑、多様な課題を抱えているところが少なくない。子ども一人一人の個性を伸ばすためには、子ども一人一人と向き合い、リレーションを深め、児童理解を充実させることが必要不可欠である。だが、前述のように多くの学校現場では、様々な教育的課題が障壁となり、教師には子どもと向き合う時間と心の余裕が不足している状況にある。学校業務の改善の必要性が叫ばれ、業務改善に各学校校尽力している。成果をあげている学校も見られるが、業務改善に対する教師の実感是十分高まっているとは言い難く、子どもと向き合う時間と心の余裕の確保の難しさを招いている。

こうした現状を打破し、教師がゆとりをもつ

て子どもと向き合い、個々の個性を伸ばし、力を付ける教育を実践していくためには、大胆な取組が必要と考え、二つのことについて提言を行いたい。

一つ目は、小学校における学級担任二人体制(副担任配置)の導入である。全校児童数が三百人超等、一定規模の学校が対象となるものと考え、子どもの実態は様々で、中には深刻な課題を抱える子どもも存在する。また、現在の学校現場では特別な支援を必要とする児童数が増加傾向にある。こうした厳しい環境下で、三十、四十人の児童を一人の担任のみで担当し、指導するのは負担が大きく、無理であると言わざるを得ない。副担任との二人体制であれば、単純な見方ではあるが、業務も二分できる。課題に対しても連帯して対応でき、心理面の負担もかなり軽減できるものと考え、そのことから、心にゆとりと、これまでよりも多くの時間を確保して、子どもと向き合うことができ、児童理解が深められる。また、指導方法、内容等についてもリフレクションする場も必然的に確保することができ、指導の改善が達成されるのではなかるうか。この結果、教師と児童間のリレーションが強化され、子どもの個性を伸ばす教育が推進されていくものと考え。

二つ目は、新学習指導要領実施に伴い、新た

に指導内容として加わった教科など、より専門的な指導のスキルが必要な教科指導への対応や授業準備に時間を要する教科、自然環境等調整し難い条件が関わる教科などの指導においては、専門教科担任を配置することが望ましいと考える。理科・音楽科・家庭科・図工科・外国語科等があげられる。教師個人の専門性も生かされ、児童の学びも充実し、学力向上も見込まれる。担任は、他の授業の準備、教材研究に時間をかけることができ、指導法の改善が進み、児童の学びが一層深められる。子ども一人一人と関わる時間、心のゆとりも確保され、担任と児童のリレーションも良好で力強いものとなり、子どもの個性を見取る関係づくりが達成される。そして、このことは多くの教育的課題解決の循環を促すことにつながっていくものと考え。

これまでに述べてきたように子どもの個性を見取り、伸ばす教育を充実させるためには、教師の時間的・心理的なゆとりが必要である。人員の加配については、予算の確保が必要となり、たやすいことではない。ICTの活用、校内支援システムの整備等も効果的な方策であることは否定するものではないが、教師の子どもへの関わりが、子どもの個性を伸ばす一番の原動力となるのは間違いない。教師集団に厚みをもたせることが、子どもを取り巻く多様な課題に立ち向かう教師力を高め、子ども一人一人の個性を伸ばす教育の発展につながる。「だれもがどこかで 何かが一番」子どもと向き合い、子どもとともに歩む本来の教師の姿を取り戻すことの重要性を改めて認識し、微力ながら力を尽くしていきたい。



## 生徒を主人公にする教育の在り方

開陽高 阿 多 理

### 一 はじめに

開陽高校は、通信制課程と定時制課程、全日制課程の三課程を併せ持つ、県内で唯一の単位制高校である。その歴史は、平成十二年に定時制課程と通信制課程を併置する高校として鹿児島市下伊敷に開校し、平成十五年に全日制課程を加え、現在の谷山の地に「光と風と森のある学校」として新校舎を建設し、新たなスタートを切った。

このように、恵まれた環境と施設・設備が整った学校ではあるが、あくまでも学校での主人公は生徒である。教職員は「学ぶあなたが主人公」を合い言葉に、学習活動はもとより、部活動や生徒会・委員会活動、ボランティア活動などの様々な活動を通して、生徒一人一人の個性や能力、適性、特技等を伸ばし、充実した学校生活を送れるよう支援している。

### 二 多様性と共生

本校の最大の特色は、単位制の九十分授業にある。自分の進路希望や学力、興味・関心に応じて教科・科目を選択し、自分だけの時間割を作成することは一見「自由」だが、同

時に「自己管理」と「自己責任」が問われる。また、制服や細かな校則が無いため、自分で考え行動することも問われる。つまり、開陽高校生にとっての「自由」は、厳しさや辛いことから「逃れる自由」ではなく、自分自身の「夢・実現」のために邁進する「向かっていく自由」とも言える。

少子高齢化が進む現代日本においては、外国人労働者や高齢者と共に働くことが日常となり、異なる価値観や考え方(Diversity)を尊重することが、企業の成長や個々の幸せ、ひいては日本の繁栄につながると考える時代が来ると予想される。いわゆる「多様性と共生(Diversity & Inclusion)」の時代の到来である。本校の校歌に「道はそれぞれ違うけど目ざすは一つ 夢の実現 ひたすらに」という歌詞がある。三つの課程を併せ持ち、幅広い年齢層の方と一緒に学べる素晴らしい学習環境で、将来の日本が目指すであろう「多様性と共生」を日常的に体現できる学校づくりをより一層推進する必要がある。

特に、本校では、平成三十年度から県内の県立高校では初めて通級による指導を開始し

ており、担当の教員はもとより、全ての教職員がその意義や目的を共通理解して、通常学級における支援の在り方を研究・修養している。多様な生徒たちが自尊感情(自己肯定感や自己効力感、自己有用感)を育み、社会人として自立できるよう、保護者や前籍校とも連携して学習歴や生育歴、生徒・保護者の困難さを把握し、ユニバーサルデザインの視点に立った「分かる授業づくり」を行うとともに、就職支援シート等を活用して就職先の企業に生徒の支援に関する情報をつなぎ、離職率の低下に努めている。

### 三 おわりに

まだ初任の頃、初めての研究授業後の授業研究で、先輩の先生が自分の目の障害を告白した後「黒板に赤いチョークで字を書かれると全然見えんのよ。」とおっしゃったことを今でも思い出す。自分の障害を例に「授業では生徒という相手がありその相手を常に思いやるべきだ。」と言われた気がして猛省した。

ユニバーサルデザインの基本も「相手意識」だろう。多くの多様性を想定し、生徒一人一人を思いやった授業づくりを推進すれば、生徒の「困り感」は少しでも払拭できよう。そのためには、やはり教員間の情報共有と研修の積み重ねが大切だと考える。

本校の生徒たちを見ていると、「皆と同様に学びたかったけど学べなかった。」という子が実に多い。「同様から多様に」を次の合い言葉に、一人一人の可能性をもう一度伸ばせるよう、教職員と共に邁進していきたい。



## 「子どもが主役 楽しい学校」をめざした学校経営 小規模校教育を生かした魅力ある学校づくり

上場小(北) 山崎 和 正

### 一 はじめに

本校は、出水市の北東部にある標高約五百メートルの上場高原に位置し、夏は涼しく避暑に適した地にある。また、教室の窓から四季折々の風景を楽しむことができる豊かな自然環境の中にある。創立六十七年目を迎える今年度は、児童数十四人の複式三学級編成でスタートした極小規模の学校である。

### 二 本校教育のめざすところ

本校では、「子どもが主役 楽しい学校」づくりに向けて、全職員が知恵を出し合いながら、そして地域とも連携・協力した「チーム上場」として、本校の教育活動を更に盛り上げていくところである。

### 三 へき地・小規模校教育の充実

#### (一) 「少人数ならでは…」の教育の充実

本校は、少人数指導のよさを生かした学力・体力向上、心の教育(命を大切にする教育)の充実に取り組んでいる。各種学力・体力調査や日常観察などから個別の指導計画をつくり、年間を通して個人の事態と変容をとらえ、きめ細かな指導に生かすことができる。また、今年度から出水市指定研

究協力校として、「へき地・小規模校教育」の研究を行い、更なる本校教育活動の充実をねらっている。

その中で、特に今年度から全面实施となる高学年の教科「外国語」の授業では、複式学級での指導実践ではなかなか難しい面がある。そこで、単式授業での指導ができるように、管理職や外部講師などの支援による授業づくりを模索している。

#### (二) 「上場ならでは…」の教育の充実

身近な自然を生かした教育として、これまでに乗馬体験やキジの放鳥体験、五右衛門風呂体験などを実施している。さらに、地域の長寿会との積極的な交流を行う中でグラウンドゴルフ大会やソーメン流し体験、収穫祭などの教育活動を実施してきた。

今年度は、「カブトムシの学校」と銘打って、豊かな自然を生かした教育活動を学校内外にPRするとともに、総合的な学習の時間の単元開発や構成の工夫、そして地域との更なる連携を図っているところである。

また、樹木の剪定・校庭除草や整備をは

じめ、学校裏山の活用や農作物栽培などの教育環境の整備を計画的に進めている。

今年度は地域やPTAの支援の下、学校前に無人販売所を設置した。これは、児童が栽培した農作物や地域からの提供物を販売することで、キャリア教育の充実とともに、上場地域の活性化にも効果を発揮している。また、ヤギの飼育を学校で始めた。このことは、児童の情操教育の充実にたいへん有効な一役になっている。

#### (三) 小規模校での業務改善

校務分掌分担は、小規模校の教員にとつて大きな負担となっている。そこで、本校に適した校務分掌組織の改善や行事精選・見直しを行い、校務の効果的な運用の工夫に努めている。また、全職員で衛生推進委員会を毎月実施し、「みんな考えて、できることから実践」を合い言葉に、業務改善の手立てを話し合い、実践につなげている。

### 四 おわりに

現在、小規模校における更なる教育の充実に向けて、他校とのテレビ会議システムによる遠隔合同授業の準備をしている。また、少人数では難しいサッカーやバスケットボールなどの体育の球技ゲームでは、地域青年会の方々の協力を中心に、地域人材の授業参加・有効活用を計画中である。

今後も小規模校教育の課題を少しでも克服し、そのよさを大いに伸ばしていく教育活動の実践を積み上げていきたいと考える。



## 地域を大切にし、地域から

## 信頼される学校を目指して

高隈中(隅) 窪田 智 司

### 一 はじめに

本校区は、昭和三十年一月に鹿屋市と合併した旧高隈村の全域であり、高隈山系の山麓とそれに連なる盆地や笠之原台地の一部を含んでいる。専業農家は少なく、水稲や茶業、養豚、養鶏等の農家が多い。

生徒数は年々減少しており、特設校制度や校区外通学による生徒が本年度十八人在籍している。自然に恵まれたのかな山村で育った純朴な生徒は、「一日一誉め いいとこ探し」をキャッチフレーズに、他の学校ではあまり経験することのできない行事を始め、様々な活動に積極的に取り組み、充実した学校生活を送っている。

### 二 小中一貫教育の充実

鹿屋市は、令和二年度から小中一貫教育を全面実施している。九年間を通じた継続的・計画的な教科指導や生徒指導により知・徳・体をバランスよく育て、地域の特性を生かしながら、すべての児童生徒の可能性を最大限に伸ばすことを目的としている。

本校においては、校区内の高隈小学校と大

黒小学校と一中二小での小中一貫教育に昨年度から取り組んでいる。令和二年度は、小中合同研修会も三回実施し更なる連携を目指している。

特色ある取組は次のとおりである。

- (一) 高隈小・大黒小・高隈中スタンダードを作成し、九年間を見通した教育の資質向上を目指している。(令和元年度)
- (二) 中学校のテスト期間に合わせて家庭学習強調週間を設定し、校区内で学習する環境を整備している。(令和元年度)
- (三) 高隈小・大黒小・高隈中合同の生活リズムアンケートを実施し、児童生徒の基本的な生活習慣改善に取り組んでいる。(令和元年度)
- (四) 乗り入れ授業を実施し、生徒の実態を把握しながら、中一ギャップ解消に取り組んでいる。(令和元年度)
- (五) 昨年度からコミュニティ・スクールを導入している。今年度は、高隈中学校区小・中合同運動会を実施し、学校を核にした地域づくりを目指している。(令和

### 三

(二年度)

#### 特色ある教育活動

##### (一) 農業体験学習

地域の方を講師に迎え、校区内の園児や児童、生徒、高齢者と田植えから収穫まで行う体験学習を通して、地域との交流を深め、郷土のよさを見直す学習の場となっている。

##### (二) 鹿屋養護学校との交流学習

両校の生徒一人一人がお互いの存在価値や個性を認め合い、尊重し支え合う学習の場となっている。今年度で十四年目を迎える交流学習である。

##### (三) カピックセンター(鹿児島県アジア・太平洋農村研修センター)との交流事業

JICA青年研修視察団との交流及びカピックセンターへ来所した海外の研修生との交流を通して、国際理解を深める場となっている。

##### (四) カギ引き祭り継承

高隈史談会員や地域の学識経験者から祭りの歴史等を学び、二月に開催される「カギ引き祭り」への参加と伝統文化を継承する場となっている。

### 四

#### おわりに

「一日一誉めいいとこ探し」のキャッチフレーズのもと、一人一人のよさを認め合いながら、生徒・保護者・教職員・地域の思いを学校経営に反映させ、地域を大切にし、地域から信頼される学校を目指していきたい。



## 全ての人の応援される 日本一の学校を目指して

川内中央中(北) 池田 猛

### 一 はじめに

本校は、昭和五十七年、川内西中学校と川内東中学校と合併開校し、さらに、平成三十年代に、高江中学校と統合し、来年度、創立四十周年を迎える。また、平成二十一年度から取組を進めている小中一貫教育も、一中学校、四小学校と施設が分離した形で進めているが、各学校の小中一貫推進委員会を中心に、毎年見直しながら着々と浸透してきている。これも本校区の特徴ある教育活動の一つである。

本年度、五百十八名の生徒が元気に通う、地域に愛される学校として前進している。

### 二 取組の実際

#### (一) 凡事徹底

本校の生徒指導の中心に据えて取り組んでいるのが、「当たり前」のことを当たり前に行える「いわゆる凡事徹底」である。「学力向上と生徒指導は両輪である」という言葉どおり、まずは基本的な生活習慣の確立を念頭に置いた指導である。小さなことからコツコツと、やるべきこと、やらなければならぬことは徹底させるといふ共通理解の

下で、取り組んでいる。現在は落ち着いた中で教育活動が進められているが、以前本校でも生徒指導上困難な時期があり、諸先輩方が必死に苦勞されながら「凡事徹底」を貫いてこられたことが、現在に繋がっているし、本校の輝かしい伝統となっている。

#### (二) チーム対応

今では、どこの学校でも合い言葉のように取り組んでいる「チーム対応」を、本校でも学校経営の中心に置いて学校を運営している。

本校では、三年前に「チーム学校」鹿児島県の指定を受けて、学校が行政や関係機関とがっちりスクラムを組みながら不登校支援を中心に研究に取り組んだ。その後、少しずつ学校規模は小さくなったものの、職員一人一人の意識の中で、「チーム対応力」の絶大さが浸透してきている。基本的には、学年単位で対応しているが、本校は全体職員室制をとっているために、学年間の連携も取りやすい。場合によっては、部活動顧問会とも連携し、全職員で一人一人の生徒を育てていこうとする体制がつくら

れている。また、チームで対応するために一人に負担をかけることもなく、個々のよさを発揮しながら、一人一人の生徒に寄り添った指導を展開できている。

#### (三) 主体的な生徒会活動

最後に、本校は生徒会活動も活発で、主体的な生徒会活動を実現するために担当教員が導いている。毎年生徒にテーマを決めさせて取り組んでいる。第三十九代生徒会のテーマは「頂」である。日本一の学校を目指して活動中である。特に、AKP(あいさつ 県一 プロジェクト)やシェアハッピータイム(生徒一人一人のよさを確認し合う時間)については、生徒会役員が主体的に取り組んでいる活動であり、今後も新たな伝統として繋げていきたい宝である。

### 三 おわりに

思わぬ敵(新型コロナウイルス)が世界を襲い、満足に教育活動を展開できる状況にな。緊急事態宣言は解除されたが、何時また第二波・第三波が来るかも知れない不安の中、今やるべきこと、今やらなければならないならぬことを生徒・教師・保護者が一緒に考え、この困難な時期を乗り切り、今年も共に一歩前進していきたい。



【生徒会による朝のあいさつ運動】



## 奄美小学校の子どもたちを光に

奄美小(大) 吉 峯 進

### 一 はじめに

奄美市教育行政の基本方針「地域に根ざしたふるさと教育」あまみの子どもたちを光に」を受け、本校においても、学校教育目標「共に学ぶ・育つ・生きる」のもと、子ども一人一人を光り輝かせるための教育活動を推進している。その中から、「学力の向上」と「郷土愛の醸成」を目指した取組を紹介したい。

### 二 学力の向上

諸学力検査・調査の結果から、本校の最重要課題は、学力の向上である。昨年度の結果分析からは、特に読解力が弱いことが明らかとなった。また、家庭学習への保護者の関わりや見届けが不十分であるという課題、さらに、自分の発言に自信がもてず、ペア・グループ学習が活発に進められないという課題もあった。これらを解決するため、本年度の校時表を昨年度から大きく変えるとともに、子どもたちの自己肯定感を高めるための取組を実践している。

#### (一) 音読の時間の設定

月曜日から金曜日まで、3校時始まりの前の五分間を、「音読の時間」としている。

全校一斉に音読集や教科書の音読に取り組んでいる。

#### (二) 習熟の時間の設定

金曜日の放課後、「習熟の時間」を設けている。各学年部の教員全員で補充指導等を行うとともに、週休日に向けた家庭学習の取組等を指導している。

#### (三) 一事徹底の共通実践

本年度の一事徹底を、「一日一回以上、自分と友達に3S(さすが、すごい、すばらしい)」とし、共通実践している。この取組等によって自分に自信をもった子どもが、主体的に発言することを期待している。

### 三 郷土愛の醸成

本校区は、奄美市の中心市街地に隣接する住宅街である。旧名瀬市民、奄美本島を始め、奄美各地からの移住者、県職員や教員等の転勤族等が混住している。こういったことも影響してか、奄美の他地域と比較して、自治会組織が弱い弱で、地域活動等に子どもたちが参加する機会が少ない。このような実情から、子どもたちの地域への愛着心が育ちにくいという課題がある。これを解決するため、郷土

教育の充実と、学校を核とした異年齢集団活動に取り組んでいる。

#### (一) 島唄、八月踊り等の取組

三味線クラブの子どもたちを中心に、ウタシヤ(歌い手)、チヂン(太鼓)、ハト(指笛)の希望者を募り、八月踊りや六調の島唄の練習をする一方で、その他の子どもたちは、教職員と一緒に踊りを練習する。これを運動会で発表する際は、保護者や地域住民へも参加を呼びかけ、運動場いっぱい大きな交流の輪が広がっている。

#### (二) 島唄や島口(方言)に浸る環境づくり

給食時間や清掃時間の音楽で島唄を流したり、放送委員会が島口で放送したりすることで、子どもたちが島唄や島口に触れ、慣れ親しむ環境をつくっている。

#### (三) わかくさ団活動の取組

全校児童を地域ごとに縦割りで組織し、「わかくさ団」と称している。学校においては、朝の活動「わかくさタイム」を位置付け、様々なふれあい活動等に取り組んでいる。地域においては、これが子ども会として位置付けられ、毎月第三日曜日の市民清掃への参加等、地域行事への活動につながっている。

### 四 おわりに

確かな学力を礎とし、郷土への愛着と誇りを胸に、変化の激しい時代を主体的に切り開いていく、そのような光り輝く存在へと、本校の子どもたちを高めていきたい。本年度の挑戦は、始まったばかりである。



# 鬼手仏心



## 鬼手仏心

本城小(市) 帖 地 博 之

「鬼手仏心」この言葉は、教頭時代にお仕えたE校長先生の「校長室便り」に書かれていたものです。医療の世界でよく使われる言葉で、その意味は次のとおりだそうです。

「医者の手は残酷に人体を切り開く。しかしその心は、患者を救いたいという仏の心にある。痛そうだからといって目先の優しさで手術を躊躇したら、患者のためにならない。」

E先生は、職員朝会でその通信を手にしながら、教師の仕事も同様であると話されました。

「力が入りすぎると手元が狂います。弱気になれば手術ができません。子どもを思う心が間違っていたら誤診になります。患部をそのまま見逃していたら悪化します。子どもは、教師の優力量や心の有り様一つで変わります。目先の優

しさを己の都合に引き回されていたのでは、子どもの成長は望めません。ましてや、人生の基礎を築き上げる貴重な時間を学校に委ねている子どもたちに、有意義な時間を過ごさせることはできません。そのためには、教師は修行・研修が大事です。進む方向を見誤らないように己を高める。そして課題に躊躇なくメスを入れる。そんな教師であってほしいと心から願います。」

そして、最後に、職員一人一人の顔を見回しながら付け加えられました。

「S小には、名医の先輩や同僚がたくさんいます。近くの名医に相談をしながら、自分を高めていってください。」

その後、教育に関する先生方の情報交換の場面が格段に増え、学校の雰囲気が一変したことを覚えていきます。「鬼手仏心」は自身の校長室便りでも引用させていただき、職員の協働態勢の構築や、校内研修の一工夫一改善に大いに役立っています。



できると思うから声をかけるんだ

内山田小(南) 井 手 健

原稿執筆は教職生活を振り返るよい機会となった。多くの先輩方を思い出し、改めて感謝の気持ちを持った。

再配の学校では、心構えを教わった。「行事がある日は、三十分早く出勤すること。」子どもたちは、行事が楽しみで登校時間が早くなることに気づかされた。それを笑顔で出迎える。これは今も続けている。また、家庭環境が恵まれない子どもに対して「せめて学校だけでも理想の環境にしてあげたい。」と努力する姿。それまで、自分に何ができるかということを考えたことがなかった。このことも行動の源になっている。現在の子どもたちも、教育環境に恵まれているとはいえない場合が多い。「学校に来るのは伸びたいと思っているから。できることをしてあげよう。」と職員に話している。

三十代後半の四校目、ある時校長室に呼ばれて「研修係をしないか。」と言われた。授業が苦手と自信がなかったもので、即座に「できません。」と答えた。校長先生は「そうか。」とひと言自分としては、断れてよかったぐらいに思っていた。後日、また校長室に呼ばれて叱られた。「できると思うから声をかけるんだ。できないと思ったら声はかけない。声をかけられたら、』は

い』と言え。」思ってもいない一言だった。自信もないし積極的でもない私は、自分の決めた範囲でしか考えず行動しなかった。自分の気づかない可能性があるということを初めて知った。そして、校長先生が自分を認めてくれていることをとてもうれしく思った。

研修係をすることはなかったが、数年して教頭職を拝命した。相変わらず自分に自信はなかったが、「こんな自分でもできると思われたんだ。」という妙な自信をもとに仕事に取り組んだ。できるだけ「はい。」と言うように心がけた。

あの時、校長先生にかけていただいた「できると思うから声をかけるんだ。」という言葉は、今、私が励ましの言葉として若い職員にかけている。

## 居場所を見つける

大川小(熊) 原 田 弥 生

私の初任校は喜界島の小学校である。新卒の養護教諭として赴任した私は、着任早々高熱を出し、ようやく勤務を始めたのは入学式当日。後で聞かされたのだが、周囲は「今度の新採はゴールデンウィークまでもつだらうか。」と心

配していたとのことで、前途多難なスタートであった。

そんな私に、初任校の上司や同僚の先生方はとても優しく接してくださった。今思えばとても気を遣わせていたのだと思う。「こんな私がこの学校に居てもよいのだろうか。」と迷い不安な日々を過ごしながら、何とか一年を過ぎようとした頃、教室を覗くと、ある先生が卒業証書を書いている場面に出くわした。その流麗な筆さばきに見とれていると、「今度はあなたの番だよ。」と声をかけられた。「えっ、私がですか?」と驚く私に、その年、定年を迎えられるその先生が、「今持っている才能や能力は、自分のためだけに使うものではない。学校や社会に役立ててこそ生きるものだよ。」と話された。その言葉を聞いて、私は救われたような気持ちになった。「ここに居てもよい。」と言われたような気がして、私にできることを精一杯がんばっていきたい、できることから見つけていこうと思ったことを覚えている。「自己肯定感」「自己有用感」という言葉の意味をまだ知らない頃のことである。

翌年、私は学校の浄書係となった。高校以来やめていた書道だったが、通信の添削指導を受けながら再び練習を始めた。賞状や卒業証書等、心を込めて書き続けた。途中、行政での勤務期間を除いて、これまで三十年以上書き続けていく。

本年度着任した本校は海が近く、どことなく

初任校に似ていて懐かしさを感じる。今年が校長として初めて卒業証書を書くことができるのを今から楽しみにしている。

## 師の道に命を燃やして

茶花小(大) 山 下 孝 一 郎

私が六年間通った小学校に勤めていらっしやったS先生と十五年振りに再会したのは、再配教員として赴任した大隅半島の南にある小さな学校だった。S先生は赴任した私に、校長として、

「久し振りだね。ここは再配の地、先生の力を思う存分發揮して、思い切りやりなさい。」と肩を叩いてくれた。S先生は私の担任や同学年の先生ではなかったが、弟の学年の担当をしたことがあり、私のことも覚えていてくれた。

この学校での六年間、必死に子どもと保護者と地域の方々と向き合った。新しく始まる総合的な学習の時間の研究をして、試行錯誤しながら、小さな町の人・もの・ことを生かした活動を創り上げた。

また、当時の金八先生のドラマにあったソーラン節の踊りに感動し、六年生とビデオを観ながら踊りをコピーし学習発表会で披露した。そ

の後も保護者や地域青年団の方々とも一緒に運動会やお祭りの場で踊った。

さらに、教え子が生死をさまよう大きな交通事故に遭ったり、同僚の職員が重大な人身事故を起こしてしまったりするなど、これまで経験することのなかった悲しい思いもした。

体育主任や研修係、教務主任等、様々な校務も経験させてもらった学校をS校長が去ることとなった。その時、達筆だったS校長から色紙をいただいた。そこに書かれた言葉が『師の道に命を燃やして』である。

以降、職員として、教頭として、そして、校長となった今でも、この言葉を忘れることなく、一期一会を大切にしながら、子どもや職員、保護者、地域の皆様とともに、師の道を突き進んでいる。



## ある日の校長講話



### 読書は頭と心の栄養

佐多小(隅) 上 葉 智 明

梅雨に入り雨の降る日が続いていますね。晴耕雨読という言葉があります。「晴れた日は外で田を耕し、雨の日は家の中で読書に勤しむ」天候に応じて暮らすことが大切だということをこの言葉が教えてくれます。つまり、雨が多く外で遊べない梅雨の時期は、教室や図書室、ワークスペース等で静かに読書をするにはとてもふさわしい時期と言えます。

さて、みなさんは本を読むことが好きですか。読書をするよさはいっぱいあるのですが、その中から三つ紹介します。

まずは、本を読むといろいろな世界のことをわかります。例えば、大昔の地球や未来の地球の様子、今起きている世界の出来事、まだ見たこともない生き物等について知ることができ、とつても賢くなります。

次に、本を読むと考える力を身に付けることができます。みなさんが本を読んでいる時は、自分の頭で想像しながら、まるで自分が経験しているような気持ちで読んでいます。この想像する力が、大脳という部分の働きをよくするので、みなさんの考える力を高めてくれるのです。最後に、本をたくさん読む人は「人の気持ちを汲み取ることができる、優しい人になる」ということです。物語の登場人物は、一人一人がそれぞれ考えをもっています。登場人物一人一人の気持ちを読み取ることで、物語の中だけではなく、自分の身のまわりの人の気持ちもわかり、思いやりのある優しい心も育っていきます。例えば、小さい時に絵本をたくさん読んだ人は、あまり読まなかった人に比べると、高校生くらいになった時、電車やバスでお年寄りや体の不自由な人に席を譲ろうと思う人の人数がはるかに多いという調査結果もあるそうです。

「読書は頭と心の栄養」という言葉もあります。六月の読書週間は今週で終わりますが、図書室はいつでも開いています。たくさん本を読んで、賢く優しい佐多っ子になりましょうね。



## 夢は見るものではなく 実現するもの

東谷山中(市) 大戸 剛志

おはようございます。皆さんは、夢と言ったら、何を思いますか。今日は、朝起きる寸前に見る夢ではなく、皆さんが考える将来の夢についてお話しします。

新型コロナウイルス感染症は、短い期間で、全世界に感染を広げていきました。目に見えないウイルスの感染力はすさまじく、人々の動きと接触等によって日本でも岩手県を除く四六都道府県に広がり、多くの人命を奪っていきました。現在、感染者数は少なくなったものの、未だ収束するには見通しが立ちません。

そのような中、未知のウイルスがもたらす感染症の危険と隣り合わせで、患者さんの治療に当たっている医療従事者の皆さんがいます。

皆さんのご両親や親戚の方の中にも関係者がいるかもしれません。この方々は、どのような気持ちで仕事をしているのでしょうか。「仕事だからしかたがない」と思って治療や看護にあたっているのでしょうか。きつと「自分が選んだ仕事だから」とか、「何よりも重い命を守るために全力で取り組もう」などと信念を持って働いておられると思います。

今年度からキャリア教育の一環として、自分の変容や成長を自己評価するために「キャリアパスポート」を作成します。この取組は、小学

校から高校までの皆さんがポートフォリオ形式で「これまで」と「今」を「これから」につなぐものです。

ぜひ、この取組を、自分の夢は何なのだろう、自分はどんな職業に就きたいのだろう、これからどんな人生が待っているだろうと考える機会にしてください。

「夢は見るものではなく実現するものです。」  
夢の実現のために今は、命を守るための行動が大切です。ソーシャルディスタンスを確保しつつ、手洗いがいいの励行やマスクの着用などを心掛けて学校生活を送りましょう。

## 「五つのCを目指そう」

鹿屋農業高 馬場 昭 浩

今日は、皆さんの目指す五つのCについて話します。まず、Challenge(挑戦)です。これは主体的に行動しようということですが、まずやってみることが大切です。やって失敗することを恐れるより、やらないで後悔することの方が後の人生では大きいと思います。自動車メーカーホンダの創業者である本田宗一郎氏は、本田氏の要求に「難しそうです。」と答えた社員に対して、「やってもいいにくいせに、います

ぐ行け(やれ)。」と言ったそうです。具体的に行動しましょう。次に、Courage(勇氣)です。我々が進歩・向上するには、まず第一歩を踏み出すことが大切です。鹿児島弁でも「泣こよか、ひつとべ」という言葉があります。三つ目は、Curiosity(好奇心)です。「好きこそ物の上手なれ」という言葉があります。誰でも好きでやっていることは一生懸命になるし、それに関して勉強したり工夫したりするので、自然に上達するものです。逆に、無理して嫌だと思いがちであっても、成長はないということです。高校時代はまず知的好奇心を持つてほしいと思います。四つ目は、Creativity(創造性・創造力)です。どうやったらうまくなるか、どうすれば試合に勝てるかなど自ら考えてやることです。部活動は自主的、実践的な活動です。顧問の先生の適切なアドバイスを受け、過去や前例にとらわれず自分たちで考えて練習方法やメニューなどを作り上げていくことが肝要です。最後は、Communication(意思疎通)です。我々人間は社会的な動物で、他者と連携することで発達してきました。このことは普遍的なことで、他者を理解し、尊重し、協力することは学校生活でもとても大切なことです。気持ちを慮る、つまり他人の気持ちを深く考えるよう心掛けてください。そのためには、孔子の言った「恕(じよ)」に通ずる心を持つことが大切だと思います。

今話した五つのCを皆さん一人一人が心掛け、充実した高校生活を送りましょう。

# 話のひろば



## 「苦手を逆手に」から…

南方小(市)

川畑 まゆみ

現在、新型コロナウイルス感染症予防のために行動自粛する日々が続いています。皆さんは、いかがお過ごしでしょうか。

元来、私は出不精なため、「ステイホーム」を特に苦にもせず、過ごしています。マスク作りや引っ越し荷物の片付け等をしながらです。

そして、今回は我ながら頑張ったと思う事が一つあります。それは、オンラインシステムへの挑戦です。臨時休校に伴う学習方法やテレビの番組づくり等で、オンラインシステムを活用している状況を見るにつれ、PCやスマートフォンでの操作に全くもって疎い私は、自分には到底無理なことと思っていました。そんな折、昨年、養護教諭の有志と立ち上げた自主研修会の役員会が通常の方法ではできず、テレビ会議で行うことを思いついたのです。それから仲間と諸情報を集め、試してみました。この間、条件を変えて二回実施しましたが、手応えを感じたため、研修会でも活用することにしました。こんな時期だからこそ、児童生徒の健康管理に

従事する養護教諭は、感染症予防の充実を図る研修を進めたいはずですが、講師陣もその道のプロです。まずは、役員が本システムに慣れ、会員の受信条件整備に取り組み、本番を迎えられるようにと計画を進めています。多様な研修方法を体験する絶好の機会になるでしょう。

私自身の情報リテラシーは、未熟そのものですが、本方法で役員会を、研修会をと発案した際に、すぐに情報を集め動いてくださった仲間たち、彼女たちの英知とパワーには感動します。只、県下各地で、本システムを活用して研修を行うとなると、私のようなタイプへの支援や幾度かのシミュレーション、そして、不測の事態への対応等、これからも入念な準備が必要です。しかし、彼女らの熱意をもってできないことはないと考えます。

思えば私は、いつも苦手を逆手にとつて、多くの人や仲間を支えてもらいながら物事を進めてきました。「退職の年、まだ間に合う。」苦手なことから逃げずに、チャレンジします。少しは、誰かを支えられるかもしれないから。

## 生きた教材を

### 子どもたちに

幸田小(始)

和田 義文

昨年九月中旬から約一月半かけて日本で開催されたラグビーワールドカップ日本大会は、ラグビーの母国イギリスと事前キャンプを本県で行った南アフリカの決勝戦で

幕を閉じ、その記憶はまだ新しい。

我が日本は、格上とされていたチームに怯むことなく、地元開催の応援にも後押しされて実力を遺憾なく発揮し、予選を全勝して目標としていたベスト8入りを果たした。「オフロードパス」「ジャッカル」「トライ」「ペナルティゴール」など、決まる度に歓声が沸き起り、「ONE TEAM」という彼らの合い言葉とその思いが、日本中に広がった。残念ながら優勝した南アフリカを前に力及ばなかったが、その最後の最後まで懸命に競技する姿に、誰もが感動を覚えあらん限りの拍手を送っていた。ある選手の「これまでいろんなことを犠牲にしてきた。」の声には、これまでに至る想像を絶する覚悟と努力があったことは、その魂のこもったプレーでわかった。その姿が、共感を呼び、にわかラグビーファンが日ごとに急増した現れでもあるだろう。

ラグビーは、紳士のスポーツとされているが、人と人がぶつかり合う激しいスポーツで熱くなりやすい場面が多い。だが、試合終了のホイッスルの後は、試合中どれだけエキサイトしたとしても、それらいつさいを水に流し、敵味方関係なくその健闘をお互いにたたえ合つてハグし合う姿や、グラウンドから出てくる対戦相手チームを勝者敗者関係なく迎える姿は、いつ見てもすがすがしく感動を覚えた。その紳士的な精神こそが、「ノーサイドの精神」。その姿は、グラウンド内だけでなく、観客席や試合会場以外でも、選手以外の観衆間にも見られた。台風の影響で試合が中止となったチームが、豪雨災害に遭った被災地でボランティアをする姿など、

この大会の影響は計り知れないものがあつた。こんな生きた教材を見逃してはならない。コロナウイルス感染拡大のため来年に延びた東京2020では、どんな感動が待っているのだろうか。楽しみである。

## 言葉の不思議な力

篠川小中(大)

中原

誠

三十年以上昔の高校時代になるが、宮崎県の県立T高校が夏の県予選大会前、鹿児島市内の強豪校と練習試

合をする為、移動のついでにと私の高校で練習試合をした。井の中の蛙、そこそこストリートには自信があつたが、ピンポン球のように外野オーバーを食らつた。打席に立つと今まで経験した事のないT高校、清野君のスピードだつた。その夏、T高校は宮崎県で優勝し、甲子園出場を果たした。そのT高校が対戦した相手が、なんと名将蔦監督率いる「やまびこ打線」の池田高校だつた。あの清野君のスピードボールをいとも簡単に池田高校の水野、江上が金属音を響かせ、ピンポン球のように外野スタンドに運んで行く。私がT高校から食らつたあの苦い体験を今、甲子園で清野君がしていると、複雑な気持ちでテレビを見たのを今でも鮮明に覚えている。桁違いのレベルの差を感じた。その苦い経験と高校野球の監督への憧れがあつたが、教員採用試験への勉強不足と自信のなさ、倍率の高さで早くも挫折、平成五年、南薩の雄と言われ

る某中学校へ赴任。当時の某中学校は生徒指導困難校と称され、再建の為か、生徒指導バリバリの若手教員が多かつた。その先輩教員の一手一投足を見て、大きな影響を受けたことは言うまでもない。それが今の私の原点である。今振り返り、「学校は人で成り立つ」この言葉を日々噛みしめている。人々教職員を生かすか、否かはトップ次第であると。必要とされ、その学校に赴き出会つた縁。人は必要な時に必要な人に出会う。先生方は過去の経験や実績から素晴らしいアイデアや創意工夫を持っている。その先生方の持つている力量をフルに引き出し生かすかは、管理職次第だと。清流は上流から。トップの表情、ものの言い方、伝え方、言葉一つで大きく変わる事を実感する。

### 言葉の不思議な力

人は一つの言葉で笑い 一つの言葉で泣く  
人は一つの言葉で喜び 一つの言葉で怒る  
人は一つの言葉で愛し 一つの言葉で憎む  
人は一つの言葉で踊りだし 一つの言葉で立ち沈む  
人は一つの言葉で生き返り 一つの言葉で絶望する  
この不思議な力を持つ言葉  
宝にもなり 刃にもなる  
ならば 宝だけを集め 小箱にしまい  
ときには出して胸に飾り  
人にもかけてあげよう

新任教頭時代、人間性豊かな校長先生と出会い、この言葉を教わつた。この不思議な言葉の力を胸に飾り、日々努力しようと思う。

## 読書案内



■毛涯 章平 著

ただひたすらに

山崎小(北) 下野 彰 久

校長職について三年目。教育改革、業務改善、新型感染症対策等、校長としての責任の重さを感じつつ、日々の対応に追われている。思いが行き詰まったときに開くのが本書である。

本書は、本町の教育長が紹介された一冊である。絶版になっていたため、古本を購入して読んだ。子どもの話、教師の話、保護者の話、自らの小学生時代の話、書き溜めてきた日記、新聞記事の話と、著者が歩んできた教育の道で感じられた「胸にこみ上げるような感動の事実」の数々をまとめた随想集である。

私が読む頁は大概決まっている。読むたび、教育のあり方や教師としてのあり方を考え、自ら生きてきた教育の道を振り返っている。経験

校の多くが小規模校である私は、次の言葉に共感し、今後も持ち続けたいと思っている。

○ 寺二大小アレドモ、住持二大小ナシ

寺により伽藍の大小の差はあるが、住職に差はない。小寺であっても立派な住職はいる。大寺の住職が必ずしも大住職とは限らない。同様に、学校も規模の差こそあれ、教師、子どもたちに差はない。小規模校であろうとも、教員共に胸を張り、一生懸命に取り組めば、大規模校にも勝る成果を出せる。気後れせず、常に正々堂々としていればよいという意味である。

他にも、感銘を受けた言葉が多数ある。

○ 教師が骨さえ惜しまなければいい子が育つ

○ さよう一日子どもを高め得たか

○ 深雪せる野路に小さき沓の跡 我こそ先に

行かましものを

○ 忍耐、時熟を待つ

○ 一分八間（物事は初めと軌道修正が大事）

○ 熱願冷諦（求めるときはひたむきに、諦めるときはさっぱりと思切る）

○ 人は、任されたとき真価を発揮する

随想一つ一つに、真の教師像が描かれている。ひたすらに教育の道を歩まれた著者の思いを、一人でも多くの教師に紹介したい。

第一法規 一七二四円

■ 渋谷 昌三 著

## 人の2倍ほめる本

大口東小（始）野 添 浩 一

「頭のいい人、悪い人のほめ言葉」というサブタイトルのこの著書には、さまざまに「ほめ言葉」の功罪が書かれてある。主に、社内での上司と部下、営業時の相手方とのやりとり等が多いが、学校の中の様子に置き換えても十分参考になる。

ほめるという行為は、「認められた」という自己肯定感を高め、「自尊心の醸成」につながる。必然、やる気が高まり、仕事の質を高めて、職員全体の空気が明るくなる。しかし、言葉の選択を誤ったり、状況にそぐわないほめ言葉だったりすると全く逆の展開になる。本書からその所謂「諸刃の刃的」性質もよくわかる。いくつかの興味深いほめ方やほめ言葉を紹介したい。

○ 『陰ぼめ』：当人のいないところでほめる。直接ほめられるよりも真実味を感じ、嬉しく感じられる。

○ 『嫌いな人ほどほめる』：ほめることにより、自身の心のわだかまりも緩和されて前向きになれる。

○ 『みんなの前ではめる』：叱る時は誰もいない所で簡潔にわかりやすく、ほめるときは、みんなの前で盛大に・・・が原則。みんなの前で

の叱責やくどい説教はなんの意味も成さない。○ 『やってみなはれ』（サントリー創始者 鳥居信治郎氏の口癖）・・・信頼して、責任を負うから、任せるといった強い信頼の証。「やってみれば」といった突き放すような言い方とは違う温かみのある言葉である。

一方で、気をつけるべき言葉もある。例えば「まじめ・正直」の類いの言葉。褒め言葉ともとれるし、小馬鹿にしているようにも受け取られる。また、昨今よく使われる「やばい」という言葉は、文字通りかなりやばい印象を受ける。世代によっては、万能のほめ言葉だったり、不安と不快感の塊だったりもする。使い方、受け取り方に一考を要す言葉である。

以上、極めて断片的に本書の要所を紹介したが、概して、ほめる際は、相手の性格・年齢・その時の状況等をよく鑑みて、鋭敏な感覚と即興性、機転を総動員すべきと感じた。

三笠書房

知的生きかた文庫  
六百八十円＋税



## 親の脳を癒せば 子どもの脳は変わる

松山小(隅) 森 吉 研 一

本書は、マルチリトメント（不適切な養育）が子どもの脳に及ぼす影響を明らかにした「子どもの脳を傷つける親たち」の原著がベストセラーとなった友田明美氏の新作です。

子どもを守るためには、養育者である保護者の意識を変えなければいけません。そこでペアレントトレーニングを行い、子どもとの適切なかわり方を親に教えます。日常生活のなかで子どもとどのようにかわると、親子の関係を良好に築くことができ、子どもが健やかに成長していくのかを、親は実践的に学んでいきます。

友田氏は、このように子どもに対してアドバイスを行うのではなく、親に子どもと接する際の技能や知識をつけることで、間接的に子どもの行動を変えていきました。このことから、親の教育の在り方が子どもの成長に大きく影響することは当然であり必然であると私は考えます。

私は本書を読み進めるうちに、過去に読んだ本と繋がっていくのを感じました。教師になった頃に読んだ「オオカミに育てられた少女」では、人間として育つには、人間としての教育を受ける必要があることを学びました。オオカミに育てられるとオオカミとして生きる手立てし

か分かりません。自分が人間であることを認識できないのです。

脳科学が進み、脳の働きが徐々に解明されると、その脳がどのように成長するのが徐々に明らかになってきました。最近では、脳科学をもとに行動分析を行い、それに伴う著書も多く出版されています。

本書の中で「こころという見えないものを明確に『見える化』する。科学は世の中のものの見方を変えることができるのです。」としています。教育現場でも脳科学をもとに教育することの必要性を感じます。

NHK出版新書 八八〇円

■樋口 裕一 著

## 頭のいい人は「短く」伝える

大和(大) 有村 哲 郎

人は、相手に話すことや書くことによって自分の考えなどを伝えている。これまでも同様の本を読む機会があり、先生方にも授業の説明をできるだけ分かりやすく簡潔に伝えるよう本校では教師の説明二〇%カットを掲げ、日々取り組んでいるところである。本文に人が集中して聞くことができる時間は二〇秒とあり、「丁寧さ」長さ」から「丁寧さ」簡潔さ」となるよ

う四行の型を応用して要約するクセをつけることが大切であることが分かった。

この本は六章から構成されており、最後は『今すぐ使える！失敗しない「伝え方」文例集』で締めくくってある。第一章では、『頭のいい人は「短く」伝える』とあり、無自覚なまま話をしてしまうと「何が言いたいの？」と聞かれてしまいがちから始まる。相手に物事を伝えるにあたり、四部構成を用いるとよいと書いてある。四部構成とは、①問題提起、②意見提示、③展開、④結論の四つである。

少し掘り下げると、小論文を例に取り上げて説明されている。①課題文が言っていることについて、賛成か反対か。②なぜそう考えるのか。③他にはどんな考えがあるのか。④最終的に何を主張するのか。短くまとめた四行の短い文章に肉付けして小論文に仕上げていくと読み手に伝えることができる。また、発信力を高めていくには、「読む」力、「書く」力をつけるために、必要なことは書いていけば読めるようになることあり、その三つのどれが欠けても発信力は育たない。さらに、型には①基本型、②結論先行型、③根拠優先型、④エピソード型の四つのバリエーションがあり、その状況に応じて使い分けていく必要があるそうだ。

発信するにあたり、有益な部分や情報を欲している。まず結論を先に書き、無駄なものを少しでも省き業務の効率化を図っていく、学校全体が元気になっていければと考える。

大和書房 六百元



季節は初夏の彩を見せ、自然は色どり豊かな緑や爽やかな青に包まれています。錦江湾はきらきらと波を立て、雄大な桜島の姿を映し出しています。

教員時代、私は松原小学校でコーチとして、子どもたちとともに錦江湾横断遠泳に挑戦することになりました。遠泳は二時間前後かかる伝統行事です。天候や潮の流れによって状況が刻々と変わるため、長時間泳ぎ続ける体力と気力が必要でした。私はこの時、遠泳自体が初めての経験でした。先輩の先生方の熱い思いやご指導をいただきながら、プールでは、子どもたちへの指導後、自ら練習に励み、さらに帰宅後も、畳の上で「一・二・三、一・二・三」と声に合わせて、腕の動き・足の動きを体が覚えこむまで毎日特訓しました。遠泳当日は、子どもたちに気を配れるほどの体力を付け、三時間半という長時間の挑戦に耐え、泳ぎ切ることができました。私個人としては、こつこつ練習したことが実を結んだことの達成感がありました。コーチとしても、子どもたちが荒波を乗り越え泳いだことに感動、そして安堵したことを覚えています。

その後、新任教頭として屋久島に赴任することになりました。充実した日々ではありませんでしたが、健康管理を兼ね、世界自然遺産となった屋久島の自然と歴史に触れるべく山登りに挑戦しようと考えました。縄文杉に辿り着くことができる体力を付けようと、朝と夕方のウォーキ

### 趣味・文芸

## 「野に咲く花のように」

青葉小(始) 松元 正 勝

ングを始めました。屋久島特有の濃い緑の中でウォーキングをしていると、野生の猿やイノシシと遭遇することもありました。付近では川遊び体験が行われており、さらさら流れる川の輝きに加え、遊ぶ子どもたちの無邪気な声が響いていました。また、地域行事の岳参りがあり、通常の山岳コースにない栗生岳コースにも挑戦しました。小杉谷や屋久杉ランド・白谷雲水峡にもよく行きました。仏陀杉・大王杉・夫婦杉などの著名樹木を見ながらのウォーキングは大変充実した時間でした。

前任校の錫山小・中学校では、朝の出勤前や

うして校区内いろいろな所を歩くことで、見えてくることもありました。それは、数百年続いている錫山の歴史であり、子どもたちや地域の皆さんの暮らしの様子を詳しく知ることができました。「地域に根ざす学校・地域と共にある学校」への取組に、このウォーキングが大変役立ちました。

そして今、現任校の青葉小でもウォーキングを続けています。学校近くには田園地帯が広がり、用水路や二つの大きな川添いに、格好のウォーキングコースがあります。朝夕の時間を利用して、よく歩いて挨拶を交わします。この

週休日に朝五時前には起きて、一時間余り校区内を歩きました。錫山は三六〇年を越える錫山相撲と江戸時代から続いた錫鉱石産出の歴史を受け継いでいる地です。車で回れば気が付かない様々な路傍の花々にも気づかされました。そして、集落の方々から「今朝歩いていましたね。あんな遠くまで歩くんですか」の声をよくかけていただきました。この時は、二時間近く歩くこともあり、私のウォーキングは半ば趣味の域を超えていたようにも思います。屋久島で覚えた「野に咲く花のように」の歌を口ずさみながら、路傍の花々も楽しみながら歩きました。こ

て校区内を歩いていると、ここ青葉でも、地域のことがより一層わかってきました。地域の止上神社の御神幸祭で、校区内を一日歩いて回ったところ、ある方から、「最後まで一日同行していただき大変ありがたいです」と言われたことも一つのよい思い出です。

赴任した学校はどこも素晴らしいところで、地域の皆さんに支えられ、充実した教職生活を送ることができました。ウォーキングを趣味として健康づくりに励む中、子どもたちが健康やかに育ってほしいと願って、今日も「野に咲く花のように」を口ずさみながら歩いていきます。

く花のように」を口ずさみながら歩いていきます。



## 歴史と文化・伝統を生かす

平山小(熊)橋 口 和 範

## 一 鉄砲伝来と宇宙へはばたく町

南種子町は大隅諸島の一つである種子島の南端に位置し、人口は約六千二百人。東西南の三方を海に囲まれ、透明度の高い海に代表される自然に恵まれた町である。一五四三年にポルトガル船が最南端の門倉岬に漂着し、鉄砲伝来の地として歴史的な由来をもち、また、日本の科学技術の粋を集めた種子島宇宙センターがあり、歴史と未来が共存する町である。

## 二 平山校区について

平山地区は種子島の東海岸に面し、西之表から南に約四十kmの所にあり、北は中種子南界校区、南は葦永校区に接した米の宝庫として知られた所である。平山小校区は、仲之町、西之町、広田、浜田の四地区からなり、総戸数二一戸、総人口三九三人の小校区である。

本校は、平山地区のほぼ中心に位置して、児童の通学距離は4km未満である。平成五年に平山中学校が閉校になった後、本地区唯一の学校となり、校区民の深い信頼と子弟の教育に対する高い関心や協力を得ている。また、平山は、盆地で太平洋に面して水田が開け、米作を中心にして農業が盛んであるが、近年水田の耕地整理や水田の畑地への切り替えも行われている。そのため、葉たばこ、ポンカン、メロン、トマト等の栽培も盛んとなり、農業経営も安定している。

## 三 歴史的な遺産と文化の伝承

平山地区には、歴史的な名所・旧跡等の文化財も多く保存され、校区民の心のよりどころとなっている。大浦の塩田跡や大浦川上流の防災のための大堤防跡(現在の美田となっている)、浜田後浜の「千座の岩屋」「恵美之湯湯治場」「恵美の江展望公園」、広田には、弥生時代の遠い先祖の生活を知る貴重な遺跡として国史跡に認定された「広田遺跡」と広田遺跡ミュージアムがある。また、種子島民謡や民族芸能等、現在も唄い継がれ、踊り伝えられている。特に、平山の「蚕舞」(かあごまあ)は県の無形民俗文化財に指定され、各集落で親しまれている。

「蚕舞」は、白頭巾に白足袋、着物姿で女

装した二才(にせ)を中心に、地域の青年や子どもたちで構成される一団が、各家を訪問し、玄関前で太鼓や鉦に合わせて唄う。そしてヨメジョウ(女装し蚕の神様を表現)が座敷に上がり、コーサシ(柳の枝に餅を刺してマユに似せたもの)を担い優雅に舞う。もともとは、養蚕が盛んになるようにと島主が奨励していたが、現在は、家内繁栄や豊年満作を祝う行事として伝承されている。

「広田遺跡」は、太平洋に面した海岸砂丘上に作られた集団墓地である。弥生時代後期から古墳時代併行期の種子島では、日本本土と異なり、古墳や墳丘墓は作らず、海岸の砂丘に墓地を作っていた。この調査は、昭和三十二年から三十四年にかけて行われ、九十カ所の埋葬遺構から一五七体の人骨が出土した。その後も発掘調査が行われ、わが国の文化形成の多様性を知る上で重要な遺跡として、種子島で初めての国史跡指定を受けた。

平山には、すばらしい文化や歴史・伝統があり、総合的な学習において、児童が郷土を知る教材として生かされている。また、学校の教育活動への地域の協力体制も整っている。今後も、更に地域と連携を図りながら、教育活動を充実させていきたい。

令和二年度

# 各種研究大会

## 鹿児島県小・中学校長研究大会

### 一 大会主題

「あしたを拓き、心豊かでたくましく生きる人間の育成を目指す学校教育の創造」

### 二期日

第一日 十一月十二日(木)

第二日 十一月十三日(金)

### 三 会場

第一日 サンロイヤルホテル

第二日 サンロイヤルホテル

ホテルウエルビュールかごしま

### 四 内容等

【第一日】開会式

全体会Ⅰ

・県教育長講話

・研究経過及び大会宣言案報告

全体会Ⅱ(シンポジウム)

主題「活力ある学校づくりにもむ

けて」

講演演題「未定」

講師 北山邦子氏

(株)きたやま副社長

人材育成コンサルタント

【第二日】分科会(全十三分科会)

■ 本年度の全国及び九州地区の校長研修会は

新型コロナウイルスへの対応のために中止と

なりました。来年度に向けて、大会主題等に

ついてのみ紹介いたします。

## 第七十二回 全国連合小学校長会

### 研究協議会京都大会

### 一 大会主題

「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会

を創る 日本人の育成を目指す小学校教育

の推進(ふるさと)の自然・歴史・文化を愛

し他者と協働しながら豊かな未来社会を創

る子どもの育成」

### 二 令和三年度開催県

令和三年度研究発表 第一分科会

### 三 令和三年度開催県

石川県

## 第七十一回 全日本中学校長会

### 研究協議会和歌山大会

### 一 大会主題

「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創

り出していく日本人を育てる中学校教育」

二 令和三年度開催県

令和三年度研究発表 第三分科会

静岡県

## 第七十二回 九州地区小学校長協議会

### 研究大会大分大会

### 一 大会主題

「自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会

を創る 日本人の育成を目指す小学校教育

の推進」

二 令和三年度開催県

令和三年度研究発表 第一分科会

福岡県

### 三 令和三年度開催県

令和三年度研究発表 第四分科会

第六分科会

## 第七十一回 全九州中学校長会

### 研究大会長崎大会

### 一 大会主題

「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創

り出していく日本人を育てる中学校教育」

二 令和三年度開催県

令和三年度研究発表 第二分科会

沖縄県

三 令和三年度開催県

令和三年度研究発表 第三分科会

\*\*\* こころの詩 \*\*\*

### 朝顔の蔓

垣がひくうて  
朝顔は、  
どこへすがると  
さがしてる。  
西もひがしも  
みんなみて、  
さがしあくねて  
かんがえる。  
それでも  
お日さまこいしゅうて、  
きょうも一寸  
また伸びる。  
伸びろ、朝顔、  
まっすぐに、  
納屋のひさしが  
もう近い。

金子みすゞ

## 一般財団法人校長会館だより

一般財団法人として、本年度の理事会・評議員会を書面にて開催し、次のように承認されましたので報告します。

- 六月四日付承認 理事会(旧)
- 六月五日付承認 評議員会(旧)

理事会(新)  
評議員会(新)

新役員等については原連合校長協会のホームページにも掲載しています。ご覧ください。

### 教育長異動

○再任 令和二年六月十一日付

日置市 奥 善一氏

### 〈お詫びと訂正〉

4・5月号の5ページに掲載した寺園伸二先生の役職名が「前県連合校長協会中学校長部会副部会長」となっていました。正しくは「前県連合校長協会中学校長部会長」です。お詫び並びに訂正をさせていただきます。

## 編集

### 後記



早六月：児童生徒の顔と名前はどのくらい一致してきたでしょうか。私はというと、廊下や教室等で話したり気になったりした子を思い浮かべながら、学級ごとの顔写真一覧をめくりつつ「あれ？この子だっけ？」の繰り返し。もともと覚えのいい方ではありませんが、マスク着用を口実にしている現状に、つくづく、未知の感染症が巻き起こしている影響の大きさを考えているところです。

卒業式・入学式の対応だけでは収まらず、年度当初に行うべき生活面や学習面での指導がいつものようにはできなかった。ほかにも、教育課程をどう組み直すか、中学校・高校では、部活動に打ち込んだきた生徒達をどうフォローしていくのかなど、課題は多々あります。新型コロナウイルスという言葉が報道されるようになって約半年、各校で様々な工夫をされてきたこと、思います。ただ対応に追われるだけでなく、この事態の中だからこそできる学びに繋げていければと考えると、学校間の情報交換と連携がますます重要になってくるかと思えます。今回、諸々の対応の中お寄せいただいた多くの玉稿も、私たちにとって大きな参考になり、また心の癒やしとなるものばかりで、深く感謝申し上げます。それぞれの地域で、手を取り合っこの難局を乗り越えていきたいものです。

内山伸明(郡山中学校)